

クイーン・ビー 最後の絶頂

【機銃を撃つたび子宮イキ♡走る棺桶♡】

【エイリアン触手で犯され肉壁電池♡】

【全員同時絶頂でド派手にメルトダウン♡】

【オルガ・コード：ゼノシリーズ】

女戦闘員・強制絶頂・尊厳破壊・戦術的消費

本格ディストピア・ホラーアクション・ハードSF

著：XYZ_L

クイーン・ビー

最後の絶頂



絶頂のまま、使い捨てられる囃（デコイ）たち
ディストピア・ハードSF・バイオ・ボディホラー
「オルガ・コード：ゼノ」シリーズ

著:XYZ_L

プロローグ:執行人と、生贄と

聖暦2060年。

人類が星々の海、フロンティアへと旅立って久しい時代。

だが、ここ入植惑星テラ・ノヴァの放棄セクター「エリア-ゼロ」は、いまだ人類の天敵——星々を蝕む異種生命体「ゼノブルード」の脅威に沈む、見捨てられた大地だった。

獣のような俊敏さと鋼のような外骨格を持つその尖兵、通称「ライダー」と呼ばれる異形が、この広大な廃墟を巣窟としているのだ。

出撃当日の早朝。

連合軍エリア-ゼロ突入基地の薄暗い第3整備ドックは、重油と冷却液、そして微かな死の匂いに満たされていた。

ドックの中央に鎮座する巨獣——全長18メートルを超える、鈍色に輝く巨大な8輪の重装甲車両。

第17分隊「アイアン-メイデنز」。近接護衛部隊（CEU）に所属する12名の少女たちが乗り込む希望の砦、ジャガーノートだ。

その傍らには、まるで粗大ゴミのように無骨な武装コンテナが積み上げられている。

今日、彼女たちの血路を切り拓くため、先行して死んでいく「デッド-ラッシャーズ」——男性サイボーグ兵たちの、露払い用の装備だった。

ドックの片隅。

砲手のクロエは冷たい壁に背を預け、粗末な煙草の煙を細く吐き出した。

耳元のインカムからは、ジャガーノートの車内通信が漏れ聞こえてくる。

ブリッジ指揮室で行われている、出撃前の最終チェックの音声だった。

『……あの、隊長……』

索敵・通信手のリナの、緊張で強張った幼い声がノイズ混じりに鼓膜を打つ。

『.....生きて帰ったら、基地のカフェの.....温かいシチューが、食べたい、です』

『ええ、必ず帰りましょう。全員で。それが私の責任よ』

応答するミリアの声は、いつものように理知的な落ち着きを保ち、きつく結い上げたシニヨンのように一切の揺らぎを感じさせなかった。

「.....チッ。甘っちょろいこった」

クロエは吐き捨て、紫煙の向こうを細めた目で睨みつけた。

(カフェのシチュー、ね.....)

クロエは昨夜、あのデッド-ラッシュャーズの男と肌を重ねた生々しい熱を思い出していた。

互いに明日死ぬと分かっている者同士の、刹那の傷の舐め合い。

強化セラミックとチタンで無骨に固められた義肢の冷たい感触。

それに抱きすくめられ、骨が軋むほどの力で腰を引き寄せられた時の圧迫感。

だが、その冷徹な機械の奥にあったのは、生身の男の荒々しい呼吸と、硝煙混じりの熱い体温だった。

奥深くを無骨に貫かれ、重い身体を重ね合わされていたあの時間だけは、機械に自我を弄ばれるような電子の快感とは違う、確かな「生」の温もりと、心の底がじんわりと満たされるような安らぎがあった。

今も下腹部の奥深くに、その男の粗野な重みと微かな熱の残滓がこびりついているような錯覚を覚える。

(.....あの感触も、もう二度と味わえねえのか)

彼女は自分たちが乗り込むジャガーノートと、その隣で最終調整を受けるもう一つの機体を、冷めた目で見比べていた。

(.....ジャガーノート、ね。兵士どもの間じゃ『クイーン・ビー』だか『絶頂バス』だか、ふざけた名前と呼ばれてるが.....)

彼女はその巨獣を希望ではなく、ただの巨大な棺桶として見つめていた。

そして、その棺桶とは対照的な漆黒の人型兵器——パルマシン「スレイヤー」。

ジャガーノートのような重装甲拠点車両ではない。

あの異形ライダーを一方的に狩るためだけに設計された、重火器搭載の冷徹な鋼の狩人。

その背部には、動力源として生体エネルギーを絞り出されるオルガコアのポッドが、冷酷にマウントされている。

そのスレイヤーのコックピットが、プシュ、と重い減圧音を立てて開いた。

トラップを降りてくる一人の男。

クロウ。

これから始まるエリア-ゼロ掃討作戦において、彼女たちジャガーノートが中枢を破壊する間、外周からライダーの残党を狩る役目を担う後方支援部隊のパイロット。

クロウの無機質な双眸が、クロエと、彼女がこれから乗り込むジャガーノートを一瞥した。

それは、生き物を見る目ではなかった。

昨夜のサイボーグ兵が見せた飢えたような生身の眼差しとは真逆の、まるでモノか、あるいは処理すべきターゲットを見るかのような、感情を削ぎ落とした視線。

クロエもその執行人の視線から目を逸らさず、自嘲するように紫煙を吐き出した。

「.....どいつもこいつも、気味の悪い『目』をしやがって」

クロウは何も言わず、無表情のまま彼女たちの前から立ち去った。

あの男は安全な後方から、自分たちが死ぬのをただ監視するのだ。

その直後、ドックのスピーカーが無機質な合成音声を吐き出した。

《CEU第17分隊、アイアン-メイデنز総員へ。直ちにFTD録画ブースへ出頭せよ》

「.....お出ました」

クロエは煙草を床に叩きつけ、ブーツの踵で踏み消した。

作戦が始まる前に、まず、あの屈辱的な儀式を済ませなければならない。

第1章:最後の「尊厳」

最終感情記録、通称「FTD」。

表向きは、万が一の戦死に備えて家族へ遺書を残すための公式施設とされていた。

だがその実態は、兵士の最期の感情さえも連合のデータベースに資産として登録・管理するための、冷徹な情報収奪システムに過ぎなかった。

「アイアン-メイデنز」の少女たち12名は、一人ずつインナースーツ姿に剥ぎ取られ、あの冷たい防音ブースへと入室させられる。

壁面を覆う吸音パネルからは無機質な消毒液と冷却ジェルの匂いが漂い、密室の冷気が少女たちの剥き出しの肌を粟立たせていた。

【FTD記録：リナ（索敵・通信手）】

「……う、う……」

最初にブースへ呼び出されたのは、隊で最年少の索敵・通信手、リナだった。

彼女のインナースーツは、連合がリナの「恥じらい」——すなわちパルス効率と呼ぶ数値を最大化するために導き出した、過剰に最適化された特注品だった。

他のメンバーのものよりも意図的に生地が薄く、特に股間や臀部のカッティングが極端に深い。

その頼りない布地は、未発達な胸の小さな膨らみの輪郭さえもくっきりと浮かび上がらせていた。

《被検体、オルガデバイスを頸部指定深度まで挿入せよ》

冷たい合成音声が室内に響く。

「.....『頸部指定深度』まで.....挿入.....」

リナは震える指先で、薄すぎるインナーのクロッチを押し開いた。

そして、羞恥に濡れた自らの性器の奥深くへ——デバイスの冷たい金属先端が、生身の子宮頸部粘膜、すなわち生体発電の炉心である

「聖杯体」にコツンと当たる、あの屈辱的な最適深度まで自らの手でねじ込んだ。

「.....ひうっ！」

リナの華奢な身体がびくんと跳ねた。

システムが最適深度への到達を認識し、正面の録画カメラの赤いランプが点灯する。

「お、お母さん、お父さん.....」

リナはレンズを見つめ、涙ぐみながら必死に遺書の言葉を紡ごうとした。

「私、がんばるから.....！ 必ず生きて帰る.....っ、みんなに感謝して.....っ、.....んうッ！」

ピシッ！

その瞬間だった。

彼女が抱いた家族への愛と感謝という人間らしい強い感情を、システムが「処理すべき異常パルス」と誤認した。

オマンコの深奥に挿入されたデバイスから、精神安定化パルス——
抗いようのない強烈な快感が、彼女の子宮頸部へ直接叩き込まれた。

「あ……っ！？ ちが……っ、私は、みんなに……っ、……あう！
ひうっ！」

言葉を紡ごうとすればするほど、湧き上がる感情が脳辺縁系の興奮として検知され、システムは執拗に「罰」としての快感を増幅させていく。

リナはカメラの前で必死に太ももを閉じようともがくが、拘束ハーネスに固定された脚は自由を奪われていた。

「……あ、あ……っ、……や、やだ……っ、あん！ んくうっ……
！」



やがて、彼女は言葉を発することを諦めた。

カメラの真正面で、涙と涎を垂れ流しながら性器を強制的に弄ばれ、口を「はう……あう……」と半開きにしたまま、小さく腰を痙攣させて絶頂させられていく。

それは官能の快楽などではなく、ただ恐怖によって精神を破壊されていく無惨な姿だった。

【FTD記録：クロエ（砲手）】

次に、クロエの番だった。

「.....チッ」

彼女は舌打ち混じりに、デバイスを自らの奥へとねじ込んだ。

着用しているスーツは、可動域を確保するために彼女自身の手で軍規違反の切り込みが入れられており、尖った乳首の輪郭が透け、引き締まった太ももの付け根が無骨なまでに露出している。

汗で肌に張り付いた黒髪の間隙から、野性的な三白眼がカメラのレンズを鋭く睨みつけていた。

(.....どうせ、こうなるんだ)

クロエは感情を一切交えず、軍の定型文だけを機械的に読み上げようとした。

だが、ふと脳裏をよぎったのは、昨夜の男の肌の感触だった。

露払いの任務で、間もなく確実に死んでいくサイボーグ兵。

(.....死ぬのは、怖くねえよ.....)

その一瞬の本音。

それは、過酷な現実に対する恐怖の裏返しだった。

ピシッ！

「.....ッ！？この、クソ機械が.....っ！んぐらッ！」

彼女の子宮口が容赦ない電子の罰に貫かれた。

クロエは唇を噛み切りそうなほど強く引き結び、屈辱的な快感に抗おうとする。

しかしデバイスは、その抵抗の意志そのものを異常パルスと検知し、さらに激しい電流を粘膜へと送り込む。

「.....ッ、.....チッ.....！」

彼女は屈辱のただ中にありながらも、その快感の質を値踏みするようにカメラを睨み据えたまま、喉の奥で獣のように低く喘ぎ声を漏らした。

【FTD記録：ミリア（隊長）】

続いて、隊長のミリアが入室した。

彼女は一切の乱れなく、完璧にスーツを着こなしていた。

きつく巻き上げられた夜会巻きが、理知的なうなじのラインを緊張感と共に晒している。

薄い生地の下で、管理された乳房が緊張によって硬く尖っているのを、ブース内の無機質なカメラだけが冷徹に捉えていた。

だが、昨夜の記憶が消えない。

部隊の装備と優先整備権を維持する対価として、司令部の上官に強いられたあの屈辱的な奉仕の記憶と、粘着質な体液の匂いが、いまでも生々しく肌に残っていた。

（あの夜.....）

ブースの冷たい空気の中で、ミリアの意識は昨夜の上官の私室へと引き戻される。

上官は、ミリアの指揮官としての「責任感」を最も侮辱的な形で利用したのだ。

「ミリア隊長。貴官の責任感は、隊の最高効率を維持するための最大のトリガーだ。この部隊の『優先整備権』は、貴官の『任務（コストの支払い）』によって維持されている」

そう告げた男はミリアのインナーを剥ぎ取り、その肉体を部隊の資源として貪った。

男はミリアの奥深くへ挿入したまま、満足感と酒の勢いから嘲笑うように口を滑らせた。

「フフ.....今日の作戦名？『ユダス・ゴート』だよ。.....ジャガーノートはただの『クソデカイデコイ（撒き餌）』だ。『餌』は、デカければデカイほどいい.....そうだろう？」

その時、ミリアはその言葉の真意を深く追及することはしなかった。

彼女にとっては作戦の不穏な断片よりも、目の前の屈辱を耐え忍び、部下たちの生還確率を1%でも上げることこそが重要だったからだ。

(.....入念に洗淨したはずなのに)

インナーの下の性器の奥に、まだ他人の精液の粘着質な感触がこびりついているような錯覚を覚える。

拭いきれない屈辱の残滓が、冷静さを保つための仮面をさらに強固に張り付かせた。

そして現在。

FTDブースの中で、ミリアは自らの手でデバイスを子宮頸部の最適深度まで挿入し、カメラへと向き直った。

「.....みんなを、必ず.....っ」

彼女が部下たちへの強い「責任感」を口にした、まさにその瞬間。

ピシッ！

「.....はうっ！」

ミリアの身体が一瞬だけ硬直した。

だが、彼女は無表情のままその罰を受け入れた。

リナのように泣き叫ぶことも、クロエのようにあからさまに抵抗することもしない。

ただカメラのレンズを真っ直ぐに見据え、完璧な指揮官の仮面を保ち続ける。

しかしその無表情の裏で、ハーネスに固定された腰が、指先が、スーツに包まれた臀部が、システムから送り込まれる執拗な電子快感にカタカタと小刻みに痙攣していた。

それは昨夜の上官による陵辱と同じ、彼女の自尊心そのものを弄ぶ合理的な屈辱だった。

ミリアはこの強制絶頂の苦痛の中で、責任感という名の偽りの希望を胸の奥深くに固めた。

【FTD記録：シズカ（機関長）——システムへの抵抗】

最後に機関長のシズカが入室した。

銀色の姫カットは、微動だにしない。

彼女のインナースーツは、他の誰のものとも異なっていた。

それはスーツと呼ぶのも憚られる、ほとんどハーネスと呼ぶべき代物だった。

連合の合理性が、彼女の機械的な精神適性を最大限に引き出すため、パルス干渉の原因となる布地を極限まで排除した「最終最適化」モデル。

彼女の乳房は存在そのものを無視するように素肌が晒され、ただ乳輪の縁だけを精密にトレースする冷たい金属フレームが貼り付けられている。

下半身は完全に露出しており、白い肌の恥丘から下腹部にかけて、子宮と卵巣の正確な生体データを計測するための無機質なセンサーパッドが直接貼られていた。

最も扇情的であり、最も屈辱的なその拘束具を、彼女は能面のような無表情のまま身にまとっていた。

シズカはその無防備な姿のまま、迷いなくデバイスを最適深度まで挿入した。

高解像度カメラが、金属の挿入によって露出した性器が生理的な反応としてわずかに濡れていく様を無慈悲に映し出す。

録画の赤いランプが点灯した。

シズカは何も語らない。

ただ、カメラのレンズを静かに見つめている。

システムが彼女の感情の揺らぎを探查する。

——10秒。

——30秒。

——1分。

デバイスから罰のパルスが放たれることは、一度もなかった。

ミリアたち生身の人間が屈したシステムを前に、シズカは自らの意志によって心拍も脳波も完璧な「ゼロ」に偽装していたのだ。

肉体がいくら濡れていようとも、システムが罰のトリガーとする「感情の揺らぎ」が検知されないため、冷徹な機械は彼女を「異常なし」と誤認した。

シズカは一切イカされることなく、無言のままブースを退出した。

この非道な儀式を終え、12名の少女たちはそれぞれの絶望と、そして「生還チケット」という名のたった一つの偽りの希望——ジャガーノートを胸に、発進ゲートへと向かった。

第2章:血路と絶望

《第17分隊、ゲート開閉シークエンス開始。汚染区画「エリア-ゼロ」へ突入せよ》

司令部からの無機質な合成音声と共に、基地と地獄を隔てる巨大な防爆ゲートが重い地響きを立ててゆっくりと開放されていく。

分厚い隔壁の向こう側に広がっていたのは、かつて「居住セクター3」と呼ばれた区画の残骸だった。

5年前、この惑星テラ・ノヴァへの入植開始と同時に建設された連合の合理的な管理都市。

プレハブ式の高層集合住宅が整然と、しかし無数の墓標のように立ち並び、碁盤目状に敷かれた舗装道路は今や瓦礫と分厚い砂塵に埋もれていた。

乾いた熱風に乗って、廃油と鉄錆、そして腐敗した有機物の生臭い異臭が漂ってくる。

その整然とした街並みの半分は、ライダーの巣窟と思われる異様な生体肉塊に侵食され、巨大な心臓のように不気味に脈動を繰り返していた。

ジャガーノートの中央オルガ・リアクターが重低音の唸りを上げ、機関室のシズから5名分のパルスを集束させて本格的な駆動を開始する。

単一のオルガエンジンしか搭載できず、エネルギー干渉に悩まされる旧来のオルガマシンとは訳が違う。

この巨獣は、いざとなれば乗員12名全員の聖杯体を物理的に同期・並列接続させ、規格外の臨界出力を叩き出す連合の最新技術「マルチオルガ・システム」を搭載した、走る要塞なのだ。

全長18メートルを超える鈍色の巨獣が、ゆっくりと暗闇へと踏み出し、ゲートの内側で一旦停止した。

「全クルー、第0フェーズ開始。衝撃に備えよ」

ブリッジで、隊長のミリアが冷静に指示を飛ばす。

「これより、先行するデッド-ラッシュャーズがゲート前面の敵集団を排除する。彼らが道を拓くまで、我々はここで待機する」

メインモニターに、先行する露払い部隊——デッド-ラッシュャーズの戦闘データが司令部から一方的に転送されてくる。

それは光学映像ですらなかった。

ただ、無数の赤いアイコンで示されたサイボーグ兵たちの機影が、それを遥かに上回る青い光点——ライダーたちの津波に呑み込まれ、瞬く間に「LOST」の表示へと切り替わっていく冷徹な戦術マップだった。

「あ……、あ……」

リナはそのあまりにも一方的な蹂躪のデータに息を呑み、青ざめた顔でモニターから目を背けた。

「……チッ」

ガン-ポッドの狭い暗闇の中、クロエは自身のサブモニターに表示された消失データを、瞬きもせずに睨みつけていた。

(.....どこだ.....あの男の機体番号、IDは.....)

昨夜、自分の肌を無骨になぞった、あのサイボーグの機械義肢の冷たさと体温。

彼女は赤い光点が一つ、また一つと消えていく中で、あの男のIDがロストの表示に変わるのを、ただ無言で見届けた。

やがて、最後の赤い光点が消滅した。

ゲート周辺を埋め尽くしていた青い光点も、その大半がデッド・ラッシューズの捨て身の突撃によって掃討されていた。

《第0フェーズ完了。露払い部隊、目標通り全滅。脅威レベル、一時低下》

《第17分隊、第1フェーズへ移行。ジャガーノートハ、直ちに「Xポイント」へ強行突入せよ》

「.....彼らの犠牲は、無駄にしない」

ミリアが、自分に言い聞かせるように呟いた。

（彼らサイボーグのコストに見合うだけの戦果を、私たちCEUは上げなければならない。それが合理的な判断だ）

彼女はこの時点ではまだ、自分たちがコストを支払わせる側、高価値なアセットであると信じて疑っていなかった。

「ジャガーノート、発進！」

ミリアの号令が下り、巨獣が切り拓かれた死体の道へと本格的な侵入を開始した。

その直後、凄まじい衝撃が車体を揺るがした。

ゴオンッ！ゴオンッ！ドガアアァン！！

重い金属打撃音と共に、ジャガーノートが激しく軋む。

周囲の集合住宅ビルの廃墟から、残党のライダーが雨のように降り注ぎ、分厚い積層複合装甲に次々と体当たりを繰り返していた。

「右舷前方に大型個体！ 接触！」

ブリッジでリナが悲鳴に近い声を上げた。

「慌てるな！ 装甲、問題なし！」

ミリアの鋭い叱責が飛ぶ。

リナは恐る恐るコンソールの数値を確認し、安堵の歓声を上げた。

「.....すごい.....！ 装甲圧、100%維持！本当に、弾いてる.....！」

車体左前方、ガン-ポッドA。

照準モニターの中央に、廃墟の壁面を這い上がってくる影が食いついた。

「見えた！ 私の獲物だ！」

それは地球の原始的な節足動物を彷彿とさせ、見る者に本能的な嫌悪感を抱かせる生体機械の悪夢そのものだった。

濡れたように艶めかしい黒色のキチン質外骨格が廃墟のコンクリートに張り付き、その硬質な装甲の隙間からは、青白く脈動する生体組織が淡い光を放っている。

クロエはその醜惡な姿に向け、躊躇なくトリガーを引き絞った。

ギュルルルルッ！

迎撃火器「ヴィブラ-リッパー」が咆哮を上げる。

トリガーと神経系が直結し、クロエの攻撃性——そのオルガエネルギーが、そのまま報酬パルスとして彼女の脳幹へ瞬時にフィードバックされた。

「.....んうッ！」

クロエの身体がビクンと痙攣した。

(.....なんだ、これ.....ッ)

オマンコの奥深くに埋め込まれたデバイスから、子宮頸部——聖杯体を直接かき回されるような強烈な快感が奔流となって押し寄せる。

反動の物理衝撃が骨盤の固定ハーネスを伝って下腹部を突き上げ、その刺激と報酬を求めて、彼女の指先は無意識にトリガーをさらに深く握り込んでいた。

ギュルルルラララッ！！

注ぎ込まれるオルガエネルギーに比例して発射レートが跳ね上がり、最大である毎分5000発に到達する。

薬莢の排出を必要としない電磁加速ケースレス弾だ。

この作戦行動中、弾丸が尽きる心配はほぼ存在しない。

超音速で撃ち出された弾頭の暴風が、火薬式の通常兵器ではありえない圧倒的な弾幕となって、群がるライダーの肉体を片端から粉碎していく。

「……ハッ！……あ……ッ！昨夜の男より、……マシかもな……ッ！」

戦闘の高揚感と、システムから貪り与えられる絶頂の報酬が彼女の脳髄で淫靡に混じり合う。

絶頂のピークを迎える刹那、クロエの股間デバイスから熱を吸い上げた生体冷却水が沸騰し、ガン-ポッド外装の排熱スリットから甘い熱風となってプシューッと噴き上がった。

それこそが、周囲のライダーを狂わせる最高効率の撒き餌パルスとなって、暗闇の大気中へ激しく放射されていく。

『クロエばかりにいい格好させるか！』

車体左後方のCポッドから、もう一人の砲手、アヤの強気な声が通信回線に響いた。

アヤもまた、薄いインナースーツの下で豊かな乳房をハーネスに締め付けられながら、ヴィブラ-リッパーのトリガーを引き絞ったようだった。

『……ッ、ひいッ！ あ、ああんッ！ まって、こんな……イっちゃう……っ！』

車内通信越しに、アヤの怯えと強制絶頂が混ざり合った悲鳴のような喘ぎ声が漏れ聞こえてくる。

彼女が放つ甘い芳香を帯びた生体波が、クロエのパルスとはまた異なる波形となって大気中へ撒き散らされていく。

「すごい……すごい！ これなら……私たち、本当に生き残れる……！」

ブリッジで、リナは何の疑いも持たずに涙声で歓喜の声を上げた。

だが、ミリアはそのリナの声を聞きながら、冷徹に戦況マップを分析していた。

（違う……。生き残れるのではない。デッド-ラッシューズが全滅して時間を稼いだから、私たちが今生きているだけだ。この装甲は希望などではない——彼らの命というコストで買われた、一時的な盾に過ぎない）

密室の中で少女たちの希望と絶望の認識が致命的にすれ違ったまま、巨獣はその真の役割——「撒き餌」としての本領を発揮し始めていた。

4人の砲手たちが発射するヴィブラ-リッパーのパルスと、車体下部の強制冷却・排気システムが排出する12名分のオルガ-パルス。

その熱風が外部へと放射されるたびに、リナの索敵予測を遥かに超える速度で、レーダー上の青い敵影が爆発的に増殖していく。

「……隊長！」

先ほどまで歓喜の声を上げていたリナが、今度は凍りついた金切り声を上げた。

「敵影、増加率.....異常です！ シミュレーションの予測値50%に対し、現数値.....500%を超えました！ これは.....！」

「リナ、落ち着きなさい」

ミリアの声は、平時と変わらない冷徹な指揮官のものだった。

「センサー系の不具合でしょう。すぐに再確認を」

「.....もう、何度も確認しました！」

リナは絶望的な叫びで、ミリアの合理的な推論を叩き潰した。

「センサーは.....正常です！ この数値は、.....『現実』です！」

ミリアが息を呑む。

リナは信じられないという表情で、青ざめた顔をミリアに向けた。

「.....あいつら.....私たちが『撃つ』たびに.....増えてる.....
!？」

その戦慄の真実がブリッジの空気を凍りつかせた、まさにその瞬間だった。

ガギィインッ！

それまでとは比較にならない、分厚い装甲板が怪力で引き裂かれる
甲高い断末魔が車内に響き渡った。

「後方！ ガン-ポッドC！アヤのポッドが！装甲が、こじ
開けられて.....！」

ブリッジのサブモニターに、阿鼻叫喚の光学映像が一瞬だけ映し出された。

Cポッドのハッチが無残にこじ開けられ、さきほどまで喘いでいたアヤが引きずり出され、漆黒のライダーに組み伏せられている。

『……や……！ いやああッ！』

通信スピーカーからアヤの悲鳴が叩きつけられる。

画面の中で、ライダーの節足に覆われた腹部がグロテスクに裂け、粘液に濡れた太く硬い突起が伸びていた。

それは兵士たちの間で恐れられている産卵管とは明らかに形状が異なり、男性器のようでありながら、先端には無数の微細な棘が逆立つおぞましい生体プラグそのものだった。

それが抵抗するアヤのインナースーツを容赦なく引き裂き、濡れたオマンコの奥深くまで、深々と突き立てられる。

『.....あ.....が.....ッ！ やだ、抜いて.....っ！ あ、あぐらッ.....
！？ 熱い.....おなかが、焼ける.....っ、イク、イッちゃ
ううらッ！』

通信スピーカーから叩きつけられる絶叫が、次第に濁った喘ぎ声へと変貌していく。

突き立てられた生体プラグから、白い麻酔液が子宮頸部へ容赦なく注ぎ込まれていた。

灼熱の激痛が、神経を塗り潰す抗いようのない支配パルスへと瞬時に反転する。

モニターの中で、アヤの身体から急速に抵抗の力が抜けていく。

白目を剥き、口元から涎を垂らしながら、彼女の四肢は絶頂の痙攣と共にぐったりと弛緩した。

ライダーはその獲物を、自らの胸部にある受容機構へと無慈悲に引き寄せた。

まだ絶頂の痙攣の余韻が残るアヤの身体が、冷たく硬い外骨格に押し付けられる。

豊満な乳房がキチン質の胸板に圧迫されて無様に潰れるのも構わず、ライダーは外骨格のアームを変形させ、彼女の肉体を自らの体の一部として強固にロックした。

そして、まるで巢へと獲物を持ち帰る蟻のように、暗闇の奥深くへと運んでいく。

映像がノイズと共に途絶え、ブリッジが沈黙に凍りついたその時——。

装甲破損による通信回線の混線か、あるいは間もなく消滅する生贄への秘匿措置すら怠ったのか。

司令部の上位管制回線から、機械のように平坦な士官たちの音声がりリアのレシーバーに流れ込んできた。

《統制本部より各班へ。標的車両——コード『ユダス-ゴート』の誘引フェーズは順調。予定通りセクター全域のライダーが集結中だ》

《了解。パルス飽和レベルは想定値に到達。Xポイント突入後、遠隔操作によるメルトダウンで汚染区画を一括『浄化』する》

《承認。CEU12名の損耗は予算内だ。これほど『合理的』な処理コストもあるまい》

コスト——。

ミリアはその一言に激しく戦慄した。

(.....12名のコスト.....？ 違う、デッド-ラッシュャーズのコストじゃない.....。まさか、私たちが.....？)

彼女の脳裏で、冷酷な推論が一気に組み上がっていく。

兵士たちの間で恐れられている苗床化——子宮に異形の卵を植え付けられるという恐怖。

だが、先ほどの生体ドッキングによる効率的な運搬と、「コスト」という非情な単語は、ミリアにそれよりも遥かに合理的で、残酷な解答を突きつけていた。

あれは繁殖ではない。

資源の運搬だ。

リナが、か細く震える声で呟いた。

「.....殺すんじゃない.....？あいつら、私たちを.....」

クロエがガン-ポッドの回線から、憎悪に満ちた低い声でその言葉を引き継いだ。

『.....「持って」いくつもりだ.....』

この瞬間、リナが心の支えにしていた生還というささやかな希望は、音もなく消し飛んだ。

ミリアの最悪の推論と、今まさに運ばれていったアヤの無惨な姿。

彼女たちの脳裏に、生還よりも遥かに恐ろしい、絶対的な絶望が焼き付いた。

——死よりも恐ろしい、生きたまま「資源」として処理される地獄が、自分たちを待っているのだと。

作品名:オルガコードゼノ:クイーン・ビー 最後の絶頂

発行日:2026年9月1日

発行者:XYZ_L

連絡先:<https://bsky.app/profile/xyz0080.bsky.social>

【注意事項】

本作には強度の尊厳破壊、生体部品化、および救いのない結末などの過激な表現が含まれております。フィクションとしてお楽しみいただける方のみご閲覧ください。

【AI生成技術の利用について】

本作の表紙および挿絵などの画像は、AI画像生成技術を利用して出力したものをベースに、加筆修正やレイアウト調整を行って作成しております。

【禁止事項】

本作のテキスト、画像を含む一部または全部の無断転載、複製、改変、Web上への無断アップロード(SNS、動画サイト、ファイル共有サイト等を含む)を固く禁じます。
